

アクセントの起源をめぐる小考：または韻律論のために・続

崎村，弘文
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/15491>

出版情報：文献探究. 23, pp.12-16, 1989-03-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

アクセントの起源をめぐる小考

— または韻律論のために・続 —

崎 村 弘 文

無アクセント方言といえ、有アクセント方言が変化の果てにたどり着いた終焉の姿と見られがちであるが、それは果たして事実なのであろうか？ そこから新たにアクセントが獲得されて有アクセント方言への推移が見られることは無いのであろうか？

本稿では、そうした問題をアクセントの起源に関わるものとしていささか大胆に考察してみたいと思う。いまだ研鑽の到らぬこと多き身としては汗顔の至りであるが、ともかくも公けにして諸賢の御批正御教示を請い、今後の研究に資したく思う。

従来の考え方では、〈アクセント〉とは、〈語句の一部を耳立たせて発音すること〉とされ、それに高低・強弱・長短等¹⁾の種別が有るとされるが、いずれの言語のアクセントも子細に観察すれば、それらがからみ合って認められる性格のものであり、結局はその言語の話者たちが音韻論的ないし韻律論的にそのいずれに認識の重点を置いているかの差が有るにすぎない²⁾。韻律論的な観点からは、「語句に高低・強弱・長短等の緊張・弛緩のリズムを配して発音すること」と把えられ、その方がより帰納的で妥当な解釈かと思われるのである。

ところで、語句頭は、発話の初頭ないしそれに準ずるものとしてそれに応じた緊張を招きやすいものであり、語句中は、発話の波に乗って比較的弛緩の生じやすいものである。とすれば、いわゆる〈アクセント〉が語句頭に来やすいのは当然のことであり、語句中に〈アクセント〉が有ることこそむしろ異様であると云えるのかもしれない。即ち、後者は話者たちがよほど発話に練達して、その初頭に緊張が無くなり、いわゆる〈アクセント〉変化の通則通り、緊張が語句の後方へずれたかたちと見るべきなのではなからうかと思われる。

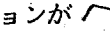
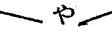
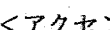
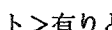
云いかえれば、〈アクセント〉は、発話初頭ないし語句頭の緊張を元来の有り方とするものであり、それが、やがて高低・強弱・長短のいずれかに収束するかたちで把握されることとなり、さらに、話者の発話に対する慣れに伴なって語句中に移行したものと解釈されるのではなからうか、ということになる³⁾。

もっとも、同じく〈アクセント〉といっても、中国語等のいわゆる孤立語の声調につい

(13)

ては若干考慮すべき余地が有るが、オードリクールやファリブランク等の云うように、それらがもともと単音節語頭子音の有声・無声の区別であったものを様変わりさせたものとするれば、やはり、声帯の振動の有無によって生じる自然な低・高の差、即ち単音節語頭の緊張・弛緩のリズムを反映したものと解すべきであろう。

なお、上述の「元来」がいつごろのことかと云うに、明確な回答は成し得ないが、おそらくは、アクセントなるものないしは言語の始まりと揆を一にするのではないかと思われる。カアカア・ピチュピチュ・ウーワンといった鳥獣の声⁴⁾にさえ、韻律論的な意味でのアクセントは有るのであるから、人間の原初の言語にそれが有ったことは十分に考え得るところである。そして、原初の初頭<アクセント>は、人間の言語がかなり複雑化し、いわばこなれた発話ができるようになるまでほとんど変化なく保たれたのではないかと推測される。九州北部の無<アクセント>方言の発話の様相などは、或る意味でその姿を彷彿させるのではないか。

該無<アクセント>方言では、いわゆる<アクセント>による語句の統成⁵⁾が成されないため、発話はいっさんになされる傾向が有り、息の一区切りの範囲でそのイントネーションが  や  の如くなりがちである⁶⁾。これは、発話の始まりに緊張を置く結果、そこが高く発音されがちであり、或いは一見矛盾するが、同様の原因により低くも発音されることによる。この一見矛盾が実は矛盾でないことは、例えば奄美大島南方方言等<アクセント>有りとなされる方言においても、 の如き<アクセント>型を基本的発音とする語句が  という全く高低逆の<アクセント>型でも発音されることがしばしばであることを参照すれば理解される。それに類する現象は、既に服部四郎氏によりロシア語について指摘されている⁷⁾が、つまるところ、<アクセント>の置かれる音節は、声帯の緊張がその短縮に向かうか延長(≠弛緩)に向かうかによって、前後の音節より高にも低にも発音され得るのである⁸⁾。

該無<アクセント>方言のイントネーションも、その初頭の緊張が同様の二様相で現われるものと解される。とすれば、該無<アクセント>方言の発話の様相は、実はまさに<アクセント>を持たんとするごく原初的な姿を示すものと、<アクセント>の生成論的には見て良いのではなからうか？

さて、無<アクセント>方言から有<アクセント>方言への変化は、語句頭が耳立つ方向へ収束する可能性が高いが、語句末が耳立つ方向へも可能性が無いではない。世界の諸

言語中、安定的な語句末<アクセント>型を持つものが少なくないこと、関東の無<アクセント>方言が<末尾を尻上がりに高く云う>とされること等、その起源が必ずしも同一でないにしても、それが一つの指向される方向である事実は、参照すべきである。

ちなみに、この語句頭・語句末は、従来あまり関連づけて考えられていないようであるが、実は「語句頭」として統一的に理解すべきものであって、さればこそ、そのいずれにも、共時的・通時的に比較的安定的に発話される語句中の部分（音節）に対して、脱落が起こりやすいとか、日本語のように母音が優勢な言語ではその箇所の無声子音は有声化しにくい（例えば、ハ行頭子音や語末の唇内入声音等）といった共通の現象が見られるのである。このことも念頭に置きつつ、上記のことがらは理解されなければならない。

無<アクセント>方言話者の<アクセント>獲得の実例としては、平山輝男氏の指摘された共通語<アクセント>習得のそれが有るが、筆者もまた同様の経験を持つ者の一人であり、その経験に照らして、次のようなことが云えそうである。

- 1) 共通語の起伏式<アクセント>型と平板式<アクセント>型とでは、前者の方が習得しやすい。
- 2) 特に、語句頭有核の型がそうである。
- 3) 習得は、高低低・低高低・低高高⇒ミドド・ドミド・ドミミといった、音楽の音階になぞらえたやり方で行なうと、より容易である。

これが妥当であるとの判定が、例えば無<アクセント>方言話者に対する<アクセント>習得訓練等を通じてなされれば、少なくとも、高低<アクセント>方言（言語）に接することの多い無<アクセント>方言（言語）の話者にとって、語句頭<アクセント>型の習得ないし獲得がかなり容易であることが確認される。その場合、有<アクセント>化の契機が、<外的>のみならず<内的>にも有りと認められることは、詳述するまでもあるまい。

以上をまとめれば、次のようになる。

- i) 無<アクセント>方言（言語）は、有<アクセント>方言（言語）の終焉の姿ではなく、原初的な姿への立ち返りである。
- ii) 即ち、無<アクセント>方言（言語）は、語句頭（または末）に緊張を持つ原初的な<アクセント>の姿を示すものであり、そこから有<アクセント>方言（言語）化が

(15)

行なわれ得るものである。

声調言語を除く諸言語（方言）のアクセントの起源は、無アクセント言語（方言）の中に求められる、ということになろうか。

【 注 】

- 1 長短<アクセント>の例としては、これまでに台湾・ルソンのアウストロネシア語のそれが報告されている。朝鮮語ソウル方言等も、語句頭の長音節が対立する短音節を持っていれば、それに該当するところである。
- 2 高低は声帯の長さや振動数に、強弱はその振幅に、長短は主に振動時間に、それぞれ関係する。いずれも、声帯に関係している点、注目されたい。
- 3 語句中に移行する際、語類によって移行に遅速の差が生じたであろう。そして、それが<アクセント>語類の誕生につながる事となったのではないかと思われる。いわゆる<二音節名詞第五類><三音節名詞第六類>に動物名が目立つこと等、参照。
- 4 ここでの、その表現そのものは、もちろん擬声語にすぎないが。
- 5 <アクセント>の機能として、従来、弁別的なそれのみが喧伝されたきらいがあるが、より重要なのは、こちらの機能の方であろう。
- 6 『福岡県百科事典』下巻（昭和57年西日本新聞社刊）<筑後方言（アクセント）>の項（奥村三雄氏執筆）に指摘有り。
- 7 「ロシア語の単語の音調について」（『音声の研究』6、昭和12年）・「アクセント素とは何か？そしてその弁別的特徴とは？ — 日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって、“調素”の単なる連続にあらず —」（『言語の研究』4、昭和48年）
- 8 親川久美子「今帰仁村与那嶺方言における単語アクセントの体系について — 『今帰仁方言辞典』を資料として —」（『沖縄言語研究センター資料』70、昭和62年2月）・上村幸雄「イントネーションについてのおぼえがき」（同74、昭和63年6月）参照。

【 補 】

- 発話や語句の初頭において緊張が見られやすいことについては、関連して吃音の現象を想起されたい。吃音は、該緊張が極度に達して、発話の初頭が話者の意志を越えて繰り

返される現象であり、或いは一種のアクセントとも捉え得るものである。

- 奄美大島南部方言についての新たな見方については、論文として近々に公表の予定である。なお、琉球大学沖縄言語研究センターでは、この10年ほど、文部省科学研究費補助金等により「奄美・沖縄諸島方言の言語地理学的研究」のための調査を継続しているが、筆者も昭和58年度より同センター研究員のひとりとして該調査に参加し、同方言の分析等を行なった。本稿を成すに際して、その折りおりの討論が役立った。末筆ながら、調査員諸氏に御礼申し上げる次第である。

— 鹿児島大学教養部助教授 —